

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第2回業務推進全体会合
議事録

日時：平成25年9月18日（水） 13：00～16：00

場所：本郷ファーストビル8階大会議室

出席者：19名（順不同・敬称略）

木村^浩（PONPO）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、木村^謙（東大）、佐田（JAEA）、
篠田（若狭湾エネ研）、渋谷（元気ネット）、白木（MNEC）、竹中（PONPO）、
土田（関西大）、中岡（元気ネット）、丸山（PONPO）、
三谷（原子力コミュニケーションズ）、諸葛（PONPO）、渡辺（新日本PA）

配布資料

- 2-0. 議事次第
- 2-1. 第1回業務推進全体会合議事録案
- 2-2. シンポジウム配布資料一式
- 2-3. 業務計画書（進捗を追記）

議題

- 0. 議事録紹介
- 1. フォーラム・シンポジウムの報告
- 2. 今後の予定
- 3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

0. 議事録確認（配布資料 2-1）

木村_浩氏により、資料 2-1 に基づき、第 1 回業務推進全体会合の内容が確認された。

1. フォーラム・シンポジウムの報告（配布資料 2-2）

木村_浩氏より、フォーラムとシンポジウムの概要が説明された。

続いて、実際にシンポジウムで用いられた資料 2-2 を用いて、木村_浩氏、土田氏、竹中氏、鬼沢氏から、発表内容の概要がそれぞれ説明された。その後、活発な議論が行なわれた。

【全体に対する意見】

- ・ 「思い込み」を強調されているが、今後どのようにその「思い込み」を明確にしていけばいいのか。
 - 昨年度の社会調査では、「原子力に携わっている人・組織に対する印象」という項目で、思い込みの一部が垣間見えた。
 - 今年度は、フォーラムおよびインタビューの発言から、思い込みの構造が明らかになりつつある。
- ・ フォーラムによって、「話せば分かる」ということが分かることには、非常に重要な社会的価値があると思う。しかし、次の一歩に進むためには、原子力政策の決定者がどのようなことを考えているのか、また、それに対し「原子力ムラの中の人」の役割は何か、という点に踏み込んでいく必要があるのではないか。
 - 将来的に、フォーラムの枠組みをそのような問題にどのように適応させるかは検討していく必要がある。しかし、来年度にすぐにテーマとして取り扱うには、課題が多い。（情報提供型になってしまう。今回は参加者に話し合うテーマを決めてもらったが、政策決定について話し合う、というところまでは到達しなかったという現実もある）
- ・ フォーラム参加者が知りたいこと（疑問点）を、各段階で集めておくと、テーマ選定に役立つかもしれない。
 - 原子力の色が濃すぎると参加を拒む層が多いということも見てきたので、その点も踏まえてテーマを選定する必要がある。

【社会調査に対する意見】

- ・ 「原子力に携わっている人・組織に対する印象」における原子力学会員と首都圏住民の意見のギャップは、「原子力学会員の一部の矢面に立っている人が抱えている市民に対するイメージ」が原因なのではないか。実際に矢面に立っている人の割合は少ないが、

組織内において、その意識は伝搬する。

→原子力専門家に限ったことではない。例えば、政策決定者にも同じことが言えるのではないか。普段接している偏った集団を、世間一般だと捉えているのではないか。

- ・ 高レベル放射性廃棄物の最終処分場を早急に決定すべき、という意見が首都圏住民で増えてきたことは興味深い。賛否両方の理由で増えてきたのではないか。

→福島に残土の問題などを受け、身近な問題だと感じるようになったのではないか。

- ・ 首都圏住民は、高レベル放射性廃棄物と、福島原発事故で生じた放射性廃棄物の区別がついておらず、「とにかく放射性物質に汚染された廃棄物は早く処分すべきだ」と思っているのではないか。

- ・ 処分の必要性を感じている人は増えている。しかし、自分のところでは嫌だ（NIMBY）という感情もある。その点を設問に加えてはどうか。

【フォーラムの実施内容に対する意見】

- ・ シンポジウム後、登壇いただいた参加者の方から、「今日、ようやく元気ネットがどういう団体なのかが分かった。これが初めから分かっていたら、余計な気構え、警戒をしなかったかもしれない」という意見をいただいた。来年度は、フォーラム冒頭に元気ネットについて説明する時間を設けてはどうか。

→一方で、5回のフォーラムを経たからこそ出てきた声とも考えられる。初回の時点で詳しく説明しても、信頼は得られないかもしれない。

- ・ 参加者の出席率はどうだったか。

→原子力学会員1名が、第2～5回を欠席された（辞退）。その他の19名は、全出席、もしくは4回出席で、2回欠席された方はいなかった。

- ・ フォーラムに参加したこと、あるいはファシリテーターを経験したことを通じた、参加者の変化は追跡しているのか。

→インタビューは20名に対し実施済み。今後、インタビューの発言とフォーラムの記録を照らし合わせ、何がきっかけで、どのような変化が起こったか、という分析を進める予定。

→グループワークの手法、ファシリテーションの手法がためになったとおっしゃっている方は多かった（特に首都圏住民参加者に多い）。

→参加者にファシリテーターをしてもらうことによって、情報提供型ではない、原子力について教え込もうとする会合ではないということが伝わり、それが境界を越える一助になったのではないか。

- ・ 第3回までで、お互いの人となり理解できてきた雰囲気を感じたので、第4回で意見がぶつかるテーマを設定したとあるが、それに対する参加者の反応はどうだったか。

→まだ分析中だが、インタビューでは、「確かに3回くらいで人となり理解でき、第4回でははっきり意見を言えるようになったと思う」という意見が多かった。

- ・ サブファシリテーターは、1 グループに 2 名必要なのか。1 グループに 2 人もいたら、威圧感を感じないか。
 →ファシリテーターの補助、時間管理、見える化の補助（付箋に書かれていない発言の書き取り）が求められており、1 人では手が足りなかった。
 →終盤は、参加者が自発的にグループワークを進める場面も多く、サブファシリテーターは黒子に徹することができたため、威圧感も少なくなっていたと思われる。
 また、第 2 回以降は、サブファシリテーターの役割を資料に明記し、毎回確認していた。
- ・ 参加した 20 人には、大きな収穫があっただろう。しかし、それを国民全体にどのように広げていくかということが、この手の取り組みの大きな課題だ。
 →「市民」で考えれば 1 億分の 10 だが、「専門家」で考えれば 2 万分の 10 である。専門家を教育することは、効果が大きいのではないか。
 →本プロジェクトは、過去に行われた情報提供型のコミュニケーションではなく、双方向のコミュニケーションである点に新規性がある。
 →ファシリテーション技術は必要だが、原子力に精通した人が必要ではない（今回は、原子力学会員なら誰でもよかった）フィールドである点も大きな違いである。ルールを定めることで、誰でも参加できる枠組みである点は、大きな強みではないか。
- ・ 専門家は、実際にムラの中にいる、外にいるということとは関係なく、世間からはムラの間人だと思われているのだと自覚して、行動すべきだ。（その自覚があまりに低い）

2. 今後の予定（配布資料 2-3）

木村^浩氏より、資料 2-3 に基づき、今年度の業務の進捗状況、および、今後実施すべき業務内容の確認がなされた。今まではフォーラムの計画、準備、実施が中心的な業務であった。今後は、社会調査の再設計と実施、フォーラムの再設計を進めていくことになる。

3. その他

木村^浩氏より、今後の業務推進全体会合のスケジュールが説明された。第 3 回は 10 月下旬から 11 月上旬に実施予定で、フォーラムの分析結果の進捗報告が行われる予定である。第 4 回は 12 月実施予定で、社会調査票を確定させる。また、フォーラム再設計の進捗報告がなされる予定である。第 5 回は 2014 年 3 月実施予定で、2013 年度の成果の取りまとめを行う予定である。

以上